

上空からの美

古代の手法で作る田んぼアート名人

山田 重隆

聞き手・青柳大輔 松森亮希（石川県立七尾高等学校1年）

古代米に惹かれて

昭和19年5月20日生まれです。家内と長男が今自宅に居ります。それから次男が東京、娘が京都に居ります。農業は今家内と、それから姉が来て手伝ってくれます。

無農薬、無肥料でやってるのは、古代米だけなんです。通常のコシヒカリとかね。出荷をする米については、農協が指導するやり方でやっています。まず、ひとつはね、有機、色のついた米なんです。籾殻の籾を剥いたらね、赤、黒、それから黒紫。そういうような米が古代米なんです。

普通、たとえば、黒米はね、白米2合に大さじ1杯ぐらい。それから、赤米だと1~1杯半ぐらい。精米はしません。白米にない栄養があったりね、いわば健康食ブームでずっと伸びてきました。そういう米なんです。アントシアニンとかね、そういう成分があって、活性化酵素を促進するとか。色素に含まれてますので、量はそんなに取れないんですけど、まあ健康食ブームで、ここ最近、20年間、伸びてきたということなんです。

農業と祭り

これ農業と祭りってのはね、昔から密接な関係がありましたね。田舎ですと春祭りとかね、秋祭り。それから、本宮さんっていうお宮ご存知かな？ あそこにね11月13日と12月13日ですねえ、昔からのお祭りがあって、根の着いた稲がお供え物のひとつになってるんですよ。

11月13日、12月13日、お供えしたものを1年通して掛けとるといふ神事があるんですよ。それから、おいで祭り。その時にも種もみがお供え物のひとつになってます。五穀豊

稔祈願と五穀豊穡感謝をする祭りがこまできとると。その中で、たまたま私の家は代々ずっと続いているもち米を古代米に切り替えた。古代米ってこんな色しているんですよ。



さきほど言ったように、これはもち米に決まっていますので、かぐらもちを作って、ご馳走を作ったと。お祭りがあって、農家の人が五穀豊穡とかね、感謝をずっと表してきた。七尾の文化の中では、そんな流れがありますのでね。

古代米とアート

古代米っていうのは自然のもんだから。こっち入ったのは、縄文時代か弥生時代の中国の雲南（うんなん）省から入ってきたって言われてます。だから、もともと原種に近いです。それで、私が今やっているアートの話を言うと、違う品種の稲を組み合わせると絵描いたり、字書いたりします。その稲の品種の特徴がわからないとアートになりません。たとえば、いつごろ穂が出るのか、その出る色は何色か、そういうその稲の特徴がわかっていると、ちょっとアートはできません。

きっかけは今から14年前の話になるけど、田んぼ1枚で黒い穂の稲と赤い穂の稲、田んぼ半分に分けて植えたんですよ。そしたら、その頃、こんな稲っちゅうのは、この辺の人

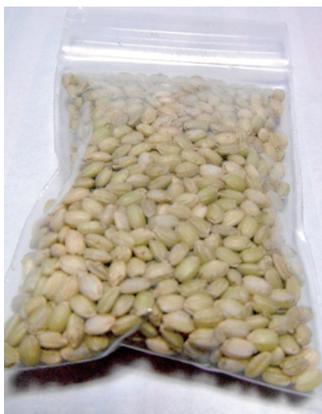


タイガーマスク

は見たことありません。おそらく、花に見えたのでしょうか。「あの人は田んぼになんちゅう花植えたんでしょうね？」と言われるようになり、これ面白いなあ。それで、あのアートやってみようかと思ったんよ。

美の追求のための壁

アートするときに肥やしがありすぎて倒れちゃったら、アートになりません。この品種はどのくらいいるのか。波板のいらなくなったやつにね、肥料を種類の違う3つの古代米を入れてね、試験やったりね。それから、アートを仕掛ける。たとえば去年のですけどね。これはね、青森で作ら



れている品種でね。正確に言うと、青けいかん175号っていう品種です。たまたま震災がきたから、地震がきたから、これやってみよう。復興支援でね。ただ、古代米だけでアートやるとね、期間が長くなります。例えば、黄色い色の稲がなかったら、タイガー

マスクになりません。猫になります。だから、そのテーマにあった稲穂の色はあるのかなのか。今ある程度、7~8品種もっていますので、足りない分に対しては足していくと。だから、テーマによるけどね、そのテーマにあった稲穂があるのかなのか。それによって、正直言って、その絵が生きるか死ぬかが決まります。

アート作成

まずね、植えやすくするために代掻き(しろかき)してね、ならしちゃうのね。そうして、2、3日沈めないと、どろどろだから。1週間前くらいから代掻きをして、土が落ち着いたときに枠を転がします。そしたら、この枠を転がすと線が付きますよね。そこに、何列の何行目にどの品種を植えていくと。パソコンでやってね。ただね、テーマはあんまりありません。まず、テーマで悩みます(笑)。来年は、なんかいいテーマありますか？たださっきも言ったけど、言われたテーマにあった品種があるかどうかということやね。地図なら地図だけ、ぱっと書くんじゃなくて、この中に、これみたいに(右頁右上の写真)文字を入れてるんですよ。これは、東北地方の地図なんですよ。日が経つてくると、こういう仕掛けをしながら植えております。時間も考えながら。あの品

種ならいつ頃生えかかるかな、そうするといつ頃植えないといけないのかなあ。種まきするのも逆算だね。私の場合は、体験も含めていますので、保育園の子供に種まきさせたり、植えさせたり。草取り一緒にやったりね、3回はしないと草に負けちゃいます。古代米の種まきはそのテーマによって始めます。復興支援のアートは、4ヶ月目と6ヶ月目にお披露目を予定していたんですよ。その頃に照準を合わせて、種蒔きの時期は遅くてもダメ、早くてもダメ。どういうアートを完成させたいかによって、日を調整して行く必要があります。

上空からの美の完成

植えるときは、最初全部同じ色なんや。全部青い。そうすると、まず、差し替えは効きません。間違ったら間違っただけに出てきます。だから植えるお母さんたちが神経つかうのはそこです。大きな失敗はないんやけどね。この間やったやつで、思った色が出ない。その絵にあった稲の色があるか、多分これ色出るだろうかなっていうので、植えてもはつきりわからない。天候や草の生え方で大きく変わってくる。まず、テーマ決めてそれに合った稲を植えるのが大事。能登と佐渡が世界農業遺産に決まったときは、これ（写真下）やりたいって思って。トキの住めるその環境に戻そうやっていうのがひとつのスローガンや。田んぼアートは2つ作る、小さいのと大きいの。

そして、こんな困難とかを乗り越えて、古代米アートが完成するんや。

昔からの農機具と藁打ち

藁打ち機は、いっぱいあります。昔は、木槌でたたいた。んで、大変やから、機械がでんでん。穂はむしろとかにするとき、そのままの硬いままの穂では編めません。だからここに、穂を入れて、回すんや。そして何回か回すと、柔らかくなってるやろ。触ってみ、最初と全然違うやろ。縄縫うときは、繊維がある。だから、縫うんや。やるときは、向き替えながらやっていくんや。このままやったら何にも使えません。この辺では、稲の下の方（次頁右上の写真）を「すび」っていうんや。音を聞いてくれよ。こんな低い音やろ？

この機械で、やった後は、こんな高い音がしてくるんや。このくらいの音じゃないとすぐ剥けてきません。この音を私は、経験で感覚をつかんだんや。ほかにも、千歯こき、唐箕（とうみ）、足ふみ脱穀機とか今は使わないことが多くなったけど、私の作業場に残してある。それは、子供たちに体験で見せたりする時に使わせてあげたりするためやな。



復興支援のアート（がんばろう東日本）4ヶ月目の様子



復興支援のアート（がんばろう東日本）6ヶ月目の様子



能登の里山里海



(左) 藁打ちの様子
(下) 昔の農機具たち



震災復興支援

復興支援として、南相馬にお米送ったりしとるんや。ちょうど東北の方に米を送るときにね、資料として作ったんですけどね。雪の中ですよ。強いでしょ。んで、こんどは文章書いてね、東北の人に届けましよう。これはたまたま、去年



送るときに、資料がほしいっていうもんだから、作ったと。

山田さんと農業

農業とは、まず一つは恵みに感謝、農に親しむを継続すること。それが今まで続いたものだし、やっぱ感謝忘れちゃ何にもなんねーな一って。やっぱ自然相手やからその気持ちは忘れちゃならないなあって。これが私の座右の銘であり、心情でもあります。だから続けられるのかなって。やっぱ豊作やったら感謝していただくと。とれてもとれんでも、関係ないや！っていう気持ちでは続けられないなって。不作なら不作でなんでやろうって。良かったら良かったで、やっぱそういうのを生かしていくと。それが農業の根本なのかなって思います。人と人のかかわりが農業にあらわれてくると、そのかかわりが農業をやっていくことについての助けになっている。昔はそのかかわりのことを「結」(ゆい)っていう。昔は全部手作業やから助け合いが必要やったと。現代は機械化が進んで、「結」が失われている。しかし、わた

したち早乙女会は「結」の復活ができると。助け合いは大事ということです。早乙女会はお母さん方が7人、男は3人、合わせて10人でやっとなる。10年目のときに1回やめようと思ったんや。そしたらお母さん方が、干支の数だけやろうってことで、今の15周年に至るわけや。

PROFILE

山田 重隆 やまだ しげたか
昭和19年5月20日生・68歳・農業

昭和40年日本専売公社入社。平成10年同社退職。現在、無農薬農業を行いながら、田んぼアートを実施。地域の保育園にて農業体験など、次世代に昔ながらの農法を伝承していく活動も行う。田んぼアートによって浮かびあがる図柄は、毎年地元住民を楽しませている。



● 取材を終えての感想 ●

今回、聞き書きに初めて行ってみて、とても楽しかったし、いい経験になった。最初、研修を受けた時は、インタビューがうまくできるのか、本当に不安だった。しかし、今回インタビューした山田さんはとても優しく、丁寧に僕らの質問に答えてくれて、図や資料を見せてくれたり、インタビューしている僕たちにクイズを出してくれて、逆に僕たちがインタビューされている気分になった。2回目のインタビューでは、山田さんのお宅にお邪魔して、作業場や作業の様子を見学したり、体験までさせてもらった。本物の古代米も見せていただき、昔の農具を使って、藁打ちをしたり、石包丁を使って、脱穀作業もして、さらには私たちを古代人にさせてもらった(笑)

私は、この聞き書き体験を通して、古代米アートについて詳しくなったし、本物をこの目で見たいと思った。この体験がなかったら、私は古代米アートについて知ることはなかったと思う。だから、この体験は学校では普段体験できない貴重なものであると思うし、来年は私がこの聞き書きの楽しさを広めていければいいなと思う。(青柳大輔)

「能登の里山里海人」聞き書き研修、と聞いてどんなものなのかもはっきりしないまま参加しました。説明会で、名人へのインタビューとわかったときは新鮮な感覚を覚え、同時に不安も抱きましたが、山田さんの話はとてもおもしろかったし、普段まったく自分がふれることのない農業の世界もかなり詳しく知ることができました。色の違う米が生み出す田んぼアートの作成の裏には様々な努力と苦労があり、感動しました。また、教科書や資料集でしか見たことのない千歯こきなどの農具を体験できたことは、ある種の自慢になることだと思います。

僕たちは農業などといった第一次産業にあまり触れずに生活していますが、それらに力を注ぐ方たちはまさに自然と打ち解けあって生きているように思います。

また人生で素晴らしい経験ができたと思います。楽しい研修でした。

(松森亮希)



体験の様子

